

昭和38年経済学部卒
昭和45年大学院経済学
研究科博士課程修了
昭和55年経済学博士

渡辺利夫

拓殖大学学長

大学院の頃―四人の 恩師のことを想う

昭和三八年に経済学部を卒業してある民間企業に三年ほど就職し、大学院に舞い戻った。大学院に進んで無収入の私が食っていけるか。何より自分に研究者として能力があるのか。

大学時代の恩師・遊部久蔵先生のところ相談にいったところ、「そんなに思いを巡らせていては結論は出ないですよ。いまは景気もいいし、とにかく修士課程に入って二年後に改めて身の振り方を考えてみればいいじゃないですか」と安穩なことをいう。しかし、その後で、

「迷った時には歩を前に進めるとい
うのが、僕の生き方ですよ」
ともいつてくれた。遊部先生のこの
一言で私の心は決まった。

大学院では山本登先生の門をたた

いた。山本先生とその弟子である矢内原勝先生のところには、当時の日本経済の著しい国際化を反映してのことであろうが、国際経済学を学ぶとする秀才が蝟集していた。彼らの関心は圧倒的に理論であった。経済学に数学的手法が華やかに導入された時期であり、テキストの多くは数学の本ではないかと思われるほどであった。学部紀要の最初から最後のページまで数式が延々とつづいていた。自分のやりたいことはこんなわけのわからない理論などではない。現実そのものだと勇を奮ってアジア経済研究所の未知の原覚天先生のところ論文指導を乞いに出かけた。アジアのマクロ経済分析に関していくつも著作を書いていた碩学であった。

幸いなことに山本先生と原先生はアジア経済研究所の創設に奔走した盟友であった。私の論文指導は原先生さえ応諾してくればそれで結構だというのが山本先生の判断であった。山本先生の紹介状を懐に当時四谷にあったアジア経済研究所の原先生の研究室を訪れた。振り返ればこれが私のアジア研究者としての出発の日であった。

ここに記した四人の先生は、いずれももう故人である。そういえば、

今の私も四人の先生が亡くなられた
年齢に近づいている。人生とは何と
加速的なものなのであろうか。